

統語論・意味論・形態論の研究(1)

金子 義明

2018年度の英語学研究の動向について、学会活動と出版活動の面から振り返る。最初に日本英語学会主催の研究集会から振り返ることとする。まず2018年5月に、北海道大学を会場に第11回日本英語学会国際春季フォーラムが開催され、オハイオ州立大学のRobert Levine氏を含む招待講演4件、研究発表18件、ポスター発表7件、ワークショップ2件が行われた。本フォーラムは、すでに国際会議としての地位を確立しており、研究成果の国際発信、および国際発信力をもつ若手研究者の育成にとって大きな役割を果たしている。次いで2018年11月には、日本英語学会第36回大会が横浜国立大学で開催され、公開特別シンポジウム2件、シンポジウム3件、研究発表40件、ワークショップ2件が行われた。また、本大会の総会において、2018年度の学会賞(著書)に澤田治氏(三重大学准教授)の*Pragmatic Aspects of Scalar Modifiers: The Semantics-Pragmatics Interface* (Oxford University Press, 2018)が選ばれ、新人賞には大塚知昇氏(九州共立大学講師)の“Radical Free Merger” (*English Linguistics* 34-1. 2017)が選出されたことが発表された。

日本英語学会の機関誌*English Linguistics*は、35巻の1号と2号が刊行された。1号の論文は、[Invited Articles] Željko Bošković “On Pronouns, Clitic Doubling, and Argument Ellipsis: Argument Ellipsis as Predicate Ellipsis”, Uli Sauerland “Counterparts Block Some ‘De Re’ Readings”, [Articles] Norimasa Hayashi “The Derivation of Non-Restrictive Relative Clauses and Their Invisibility”, Yosuke Sato, Nobu Goto and Shin-Ichi Kitada “On the In-Situ Theory of Sluicing in English: A New Perspective from ‘Immobile’ Elements”, Masaki Yasuhara “Two Types of External Causes and an Implication for Causative Alternation”, [Brief Articles] Masashi Yamaguchi “Deriving the Direct Object Restriction”である。この他、3編の書評が掲載されている。同巻2号の論文は、[Invited Articles] Mineharu Nakayama, Noriko Yoshimura and Atsushi Fujimori “Intervention in Japanese EFL Learners’ Control Constructions with Quantifiers”, Lisa Lai-Shen Cheng “On the Interaction between Modals and Aspects”, [Articles] Hiroki Maezawa “Reconstruction, Cyclic Transfer and Reintegration”, [Brief Articles] Koji Koike “Subextraction from NP and Cyclic Linearization”であり、この他、書評4編が掲載されている。招待論文を除く論文から、2018年度の*English Linguistics*論文賞として、1号掲載のNorimasa Hayashi氏の論文と2号掲載のHiroki Maezawa氏の論文が選ばれている。

統語論・意味論・形態論の研究(1)

日本英文学会に目を転じると、5月に東京女子大学を会場に、日本英文学会第90回大会が開催され、英語学関係では、研究発表2件とシンポジウムが3件あった。日本英文学会の機関誌『英文学研究』(和文号)は第95巻が刊行され、掲載論文4編のうち、三上傑「英語の結果構文が示す「非能格性」——非能格動詞結果構文が許容する二つの解釈と構造的曖昧性」の1編が英語学分野の論文である。英文号の English Number は第60巻が刊行され、3編の掲載論文のうち、SAITO Shogo “Late Merge and Phase” の1編が英語学分野の論文である。2018年度は和文号と英文号のそれぞれに1編ずつ英語学分野の論文が掲載されており、他分野の論文を含めた掲載論文の総数から考えると健闘したと言える。

次に2018年度に刊行された書籍から英語学研究の動向を振り返る。はじめにシリーズ物について見ると、研究社の「英文法を解き明かす——現代英語の文法と語法」シリーズでは、第2巻の大室剛志著『ことばの基礎2——動詞と構文』と第5巻の吉良文孝著『ことばを彩る1——テンス・アスペクト』が刊行された。大室氏の巻は、既刊の第1巻中山仁著『ことばの基礎1——名詞と代名詞』(2016)と対をなすものである。第1章「基本形と変種」、第2章「自動詞と同族目的語構文」、第3章「自動詞と動作表現構文」、第4章「自動詞とOne's Way構文」、第5章「他動詞と使役構文」、第6章「他動詞と半動名詞構文」、第7章「他動詞と構文イディオム」、第8章「他「動詞」'd rather+S構文」、第9章「結語」から構成されている。全体としてはジャッケンドフの概念意味論の枠組みで動詞構文の分析を展開しているが、随所に梶田優氏の提唱する動的文法理論による分析が組み込まれている。概念意味論については、2017年度の本欄で取り上げられた大室氏の『概念意味論の基礎』(開拓社、2017)が優れた解説書となっているが、本書は動的意味論の洞察を取り入れることにより、「基本形と変種」に対するきめ細かな実証的分析と説得力のある理論的分析が展開されている。吉良氏の巻は、刊行予定の第6巻金澤俊吾著『ことばを彩る2——形容詞修飾の諸相』と対をなすもので、テンスとアスペクトの観点からの動詞修飾を論じている。第1部「テンス」は、第1章「時と時制と相」、第2章「単純現在時制の意味機能」、第3章「過去時制の意味機能」、第4章「英語未来表現」から構成され、第2部「アスペクト」は、第5章「進行相」と第6章「完了相」を含む。筆者もテンス・アスペクトを研究テーマの1つとしているが、学部学生にも安心して勧められる書籍にはなかなかお目にかかることができない。本書は、実証的分析と理論的説明のバランスに優れており、院生以上の英語学関係者のみならず学部生が卒業論文等の準備に参考にするのに適している。また、大室氏の巻も吉良氏の巻も、英語教育関係者にも有益な書となっている。

次に、開拓社の「言語研究と言語学の進展シリーズ」では、2018年度中に、第1巻の西原哲雄編『構造と分析——統語論、音声学・音韻論、形態論』(10月)、第2巻の

回顧と展望

早瀬尚子編『言語の認知とコミュニケーション——意味論・語用論, 認知言語学, 社会言語学』(11月), 第3巻の遊佐典昭編『言語の獲得・進化・変化——心理言語学, 進化言語学, 歴史言語学』(6月)の全3巻が刊行された。本シリーズは, 大学院生以上の学生および研究者が読者として想定されているようである。ここでは第1巻と第3巻を取り上げる。第1巻はⅢ部構成となっており, まず第Ⅰ部「最新の文構造研究と統語論の進展」は, 第1章「概要」, 第2章「基礎内容部門」, 第3章「応用進展編」を含み, ミニマリスト・プログラムとカートグラフィーの概説と, ミニマリスト・プログラムの最新の展開であるラベル付け理論とカートグラフィー理論の融合の試みを展開している。第Ⅱ部「最新の音声学・音韻論研究の進展」には, 第1章「音の世界への誘い」, 第2章「第一・第二言語の音声特性と音声習得」, 第3章「音律音韻論と音韻分析」が含まれる。第1章と2章は, この分野にあまりなじみのない初学者にも読める内容である。第3章は, ミニマリスト・プログラムに基づく最近の研究において, 1つの重要なテーマになっている「外在化」の問題に対して音韻論から取り組む場合の基礎知識を与えてくれる内容になっている。第Ⅲ部「最新のレキシコンと形態論の進展」は, 第1章「語彙素とその語形, 内容語と機能語」, 第2章「語彙素とレキシコン表示と語形変化」, 第3章「レキシコンの拡大Ⅰ: 語形成」, 第4章「レキシコンの拡大Ⅱ: 借用」, 第5章「総括」が含まれている。第Ⅲ部の表題通りに, レキシコンと形態論の最新の展開を知る格好の手引きとなっている。次いで遊佐氏編の第3巻は, 全17章からなる第Ⅰ部「最新の言語獲得研究と文処理研究の進展」(担当: 遊佐典昭・杉崎鉦司・小野創), 全9章からなる第Ⅱ部「最新の言語進化研究と生物言語学の進展」(担当: 藤田耕司・田中伸一・池内正幸), 全12章からなる第Ⅲ部「最新の比較言語研究と歴史言語学の進展」(担当: 谷明信・尾崎久男・米倉綽)から構成される。編者によれば, 「本書は, 生物言語学の一部である, 心理言語学, 進化言語学, 歴史言語学の最新の研究動向と進展を扱ったもの」であり, それぞれの分野で第一線の研究活動を展開する担当者による密度の濃い議論が展開されている。生物言語学に馴染みのない読者にとっては, 生物言語学が言語研究の広範囲の部分に少なからず関わりを持つことを理解する格好の手引きである。

生物言語学と言えば, それをキーワードとした論文集がひつじ書房から刊行された。今井隆・斎藤伸治編『21世紀の言語学——言語研究の新たな飛躍へ』であり, 第Ⅰ部「生成言語学の発展」は, 第1章「言語とは何か」, 第2章「最小計算と言語の基本構成」, 第3章「ミニマリスト統語論」から構成される。第1章と第2章は, チョムスキーの原著を日本語に翻訳したものである。第1章は2013年にジュネーブ大学で開催された第19回国際言語学者会議における特別講演に基づくものであり, 第2章は本書のための書き下ろしを翻訳したものである。生物言語学に対するチョムスキー自身の見解をまとめた形で読むことができる。第3章はミニマリスト・プログラムに

基づく統語論が簡潔に紹介されている。この枠組みの統語論の理解に必要な概念、操作、条件等が網羅されており、最新の展開であるラベル付けアルゴリズムも紹介されている。ミニマリスト統語論に馴染みのない読者にとっては極めて有益な章である。第Ⅱ部「生成言語学の関連領域」には、第4章「母語獲得と第二言語習得」、第5章「文処理」、第6章「認知意味論」、第7章「言語と文字」が含まれる。第6章で生成文法理論の言語観とは対立する認知意味論を論じているのは、編者の見識を示すものである。第7章の文字論は、この種の文脈で語られることが希なトピックであり、音声言語のみならず書記言語研究の重要性に光をあてたものとして興味深い論考である。

開拓社の「開拓社叢書」では、英語学研究的幅広い分野から1つのテーマについて200ページ前後のモノグラフが刊行されてきた。2018年度に刊行されたものとしては、阿部潤著『生成意味論入門』と、千葉修司著『英語の時制の一致——時制の一致と「仮定法の伝播」』を取り上げたい。阿部氏の『生成意味論入門』（言うまでもないが、かつて生成意味論と呼ばれた、意味現象を統語規則で扱う理論の入門書ではない）は、同著者による同叢書の一巻である『生成統語論入門——普遍文法の解明に向けて』（2016）に対する意味論版であり、第1章「意味論とは?」、第2章「語彙意味論」、第3章「論理的意味」、第4章「情報構造」、第5章「話者の視点」の構成である。実際の講義で用いられたノートに基づいて執筆されたとのことであり、講義でのテキストとして使いやすいようである。練習問題がついているが、開拓社のホームページから解答をダウンロードすることができる。もう一つの千葉氏による『英語の時制の一致』は、同著者による同叢書の一巻として発表された『英語の仮定法——仮定法現在を中心にして』（2013）の姉妹編とも呼ぶべき著書であり、両書によって英語の時制と仮定法に関する全体像を把握することができる。本書では、時制の一致に関する先行研究を網羅的に精査し、時制の一致に関わる諸現象の実態を浮き彫りにしており、今後、時制の一致を研究するにあたっては必読の書である。第5章に「時制の一致を正しく理解するための学習ストラテジー」が含まれているのは、英語学の研究成果を英語教育に還元する試みとして、本書の特色の1つとなっている。

次に、英文による書籍として、Kazuo Nakazawa 著 *A Dynamic Study of Some Derivative Processes in English Grammar: Towards a Theory of Explanation* (開拓社) と Kazuya Nishimaki 著 *A Study on Cross-Linguistic Variations in Realization Patterns: New Proposals Based on Competition Theory* (開拓社) を紹介したい。前者は2015年11月に青山学院大学に、後者は2016年1月に筑波大学に提出された博士学位論文を改訂したものである。前者は上述の梶田優氏によって提唱された動的な文法理論に基づく最新研究であり、強勢タイプの変異や音挿入等の音韻現象や主要部内在型関係節等の統語現象に見られる「派生的プロセス」に説明を与えるとともに、動的な文法理論における独自の改訂案を提示し、同理論の進展に貢献している。後者は、抽象的

回顧と展望

形態統語構造を形態構造として具現化することを優先する言語（例えば日本語）となるか、統語構造として具現化することを優先する言語（例えば英語）となるかに関するパラメータの存在を仮定する競合理論（Competition Theory）に基づき、複合語現象を巡る言語間の相違を説明する。両書ともに、興味深い言語現象に新たな視点からの説明を与えるとともに、言語理論の進展にも寄与するものである。冒頭で紹介した2018年度英語学会賞受賞の澤田治氏の *Pragmatic Aspects of Scalar Modifiers: The Semantics-Pragmatics Interface* (Oxford University Press, 2018) のように、海外での出版もめざましい成果であるが、日本の出版社から英語で出版することも、日本の英語学研究の成果を海外に発信することで多大な貢献を成しており、今後とも開拓社からの英語博士論文出版に期待したい。

ベテラン勢の衰えぬ研究活動として3点の著書を紹介したい。1つは外池滋生著『ミニマリスト日英比較統語論』（開拓社、2019年1月）であり、極小主義に基づいて、束縛現象、関係節、作用域現象、省略現象、数多くの構文・統語言語現象について日英比較の観点から、独自の提案を含む詳細な分析がなされているとともに、ラベル理論の批判的検討にも第12章があてられており、総頁数が441頁の大著となっている。著者の半世紀に渡る生成文法研究の集大成であり、日英比較統語論の1つの到達点を示している。意味論の分野では、中右実著『英文法の心理』（開拓社、2018年12月）をあげたい。本書では、中右意味論とも言うべき著者独特の視点による英文法研究を見ることができる。3点目は、中村捷著『発話型英文法の教え方・学び方』（開拓社、2018年9月）である。中村氏は、生成文法の考え方に基づく英文書として『実例解説英文法』（開拓社、2009年）を発表しているが、本書は生成文法に基づく「説明」にさらに力点を置くことにより、教授者による指導のポイントを明確にするとともに、学習者の文法事項の理解と運用を促進することをねらいとしたものである。現在、英語学研究の成果を英語教育に還元することがますます求められる状況になっているが、英語教育への貢献の具体的姿を示している。

最後に、2つの重要な翻訳を取り上げたい。1つは、今井邦彦・外池滋生・中島平三・西山佑司訳、ニール・スミス&ニコラス・アロット著『チョムスキーの言語理論——その出発点から最新理論まで』（新曜社、2019年2月）である。本書は、*Chomsky: Ideas and Ideals*, ケンブリッジ大学出版局、第3版(2016)の翻訳である。ただし、原著書の政治論を扱った第5章は省かれている。個人的にはこの章も入れて欲しかったが、ぎっしりと文字が詰め込まれた頁が440頁も続く大部となっており、割愛されるのも致し方ないと思われる。原著書は、1999年の初版以来、チョムスキーの言語理論および哲学的・思想的背景の解説書として定評があり、版を重ねてきたものであるが、扱われている題材が多岐に渡り、決して「簡単に読める」類いのものではない。本書の出版によって、日本の読者は、単に日本語で読めるだけでなく、各章末につけ

統語論・意味論・形態論の研究(1)

られている訳注を読むことによる特典を享受することができる。ただし、訳注の有益度は翻訳者の力量によるが、4名の翻訳者は原著書の翻訳チームとしては現在望みうる最高のチームであると言っても過言ではない。本訳書を読む「特典」の一例をあげると、conceptual-intentionalは一般的には「概念-意図」の訳語が当てられるが、本訳書では「概念-志向」の訳語があてられている。訳者まえがきによれば、intentionalが哲学的意味での「志向性」を意味することをチョムスキー本人に確認した上であてられた訳語である。なお、翻訳書の出版の重要性を踏まえてあえて希望を言えば、今後、学部学生にも勧めやすい軽装版の出版を考慮していただければ幸いである。

もう1つは、河上誓作監訳、濱本秀樹・吉村あき子・加藤泰彦訳、ローレンス R. ホーン著『否定の博物誌』（ひつじ書房、2018年7月）である。本書も、原著書にはない特典にあふれた翻訳書である。訳者まえがきによれば、本書は、初版 *A Natural History of Negation* (Chicago University Press, 1989) とその第2版 (CSLI Publications, 2001) を翻訳したものに、原著者による「第3版への終章」を新たに付け加えたものであり、*A Natural History of Negation* の第3版として出版されたものである。すなわち、第3版はそもそも日本語版としてのみ存在する。原著書は否定現象を統語論・意味論・語用論を含めて包括的に論じた古典としての評価が確立しているが、原著者の驚異的博識ぶりを反映して、多岐にわたる数多くの高度な議論が展開されており、近寄りやすいとは言い難いものである。それだけに、各章末の訳者注における詳細な解説は極めてありがたい。言うまでもなく、本翻訳書の翻訳チームも、原著書にとって現在望みうる最高の翻訳チームである。本書に対しても無理を承知の上で言うならば、今後、特に学生が入手しやすい形態での出版も考えていただけると幸いである。

(東北大学教授)